1998年6月30日発行

第10号

新宿ダンボール村通信

特集

Just May Day on May 1th 1998

こんなにも、彼等は生きてきた

連載論文番外編

ダンボール村なき後の新宿事情

定価300円

Just May Day on May 1th 1998

1998新宿メーデーの記録

こんなにも、彼等は生きてきた

堀江　富美江さん

東京パトロールのときは日比谷公園へ行った。大きい公園で歩きでがあった。あそこで迷子になったら、それこそ困る。あっちの方は、あんまりいなかった。

弁当作り、みんなでやって楽しかった。「おししい」と言われたけど、足りなくて残念だった。にんじん切り、次から次へ。眠いなんていうのはなかった。目が冴えちゃって。夜が明けんのが早かった。もう終わりかって残念だった。

柏木公園、最高に人が集まってよかった。こんなこと予想してなかった。デモもスムーズにいってよかった。疲れなかった。

吉田さん

初めてで大変だった。去年は小田急エースの前にいたんだけど、参加しなかった。人についていくのがやっとで、どうやっていいんだかわからない

表紙写真　橋本　弘道

特集 新宿メーデー1998の記録 —— 1

こんなにも、彼等は生きてきた　K —— 3

編集雑記 —— 7

新宿写真館　写真・橋本　弘道　文・おかだ　ともこ —— 9

論文番外編

ダンボール村なき後の新宿事情　笠井　和明 —— 11

シリーズ

アジアの人々　安江　鈴子 —— 15

道ばたの記　出口　万記子 —— 17

活動日誌　・　会計報告 —— 19

Just May Day
on May 1th 1998

こんなにも、彼等は生きてきた

K

火災があった。

秋に一人の仲間が、『誰に看取られることもなく、独り病院で死んだ』。冬にまた、別の知らない仲間が、誰にも知られずに路上で死んだ。

仲間といるということ、連なるということ、それを世間一般の人達は、「人情」などという薄っぺらな言葉でくくってしまうが、そんな、感傷的なレベルの意味ではないことは知っていた。

連帯が形を取り、群れが村になったのだと思っていた。

この群れは、いつかもっと恒久的な空間を勝ち取って行くと思っていた。

それは、公園のような比較的自由のきく場所でシェルターのような形を取っていたかもしれない。さくら寮の通年化だったかもしれない。

火災があった。仲間が亡くなった。

「物凄い煙で、もう逃げられないと思った。『ここまで連れあった仲だ、覚悟はできてるよ』って、あきらめて、二人で抱き合ったんだよ。この通風口のお陰で助かったんだ。」
生き残った夫婦は言う。亡くなったうちの二人もまた、仲のよい夫婦だった。

仲間が亡くなった。村は散っていった。

その頃、祖母が死んだ。つれあいは言った。「亡くなった人間のことを思う気持ちがあるなら、婆ちゃんのそばには、あんたが付いていてあげなさい。ここにはオレがいるから。」

しかし、祖母の白い骨を拾いながら、なぜかどうしようもないいたたまらなさを感じた。その骨が、亡くなった仲間のように思えてならなかった。

「我々があの火災で失ったものは、村ではなく仲間の命なんだ」という言葉が突き刺さる。段ボール村に住まなければ、彼らは死ななかったと言うが、じゃぁ彼等をあの村に住まなければならないところまで、排除してきた者たちは何なんだ！　そこまで言わなくったっていいじゃないか！　と思った。

新宿に帰って来ると、何か、取り残されたような思いがした。あのできごとを、私は受け止め切れずにいた。抵抗していた。だから、他の皆があの出来事を直視し、仲間の死と真っ向から向き合って、新しい歩みを始めていたときも、自分は何か中途半端なものを引きずっていた。

『炎の中で、彼等は最後に何を言いたかっただろう、彼等はどこにどのように葬られたのだろう』

這ってでも生きてきた。生きるために働いてきた。人に手の労働によらないものは何一つないはずなのに、追い立てられ、追い立てられ、じゃぁいったいどこへいけというのだ！　労働者は使い捨てのゴミじゃない！

焼け死んだ彼等は、どこに行くことができただろう？

散って行った　――もとい、野宿者は、いつだって散り散りに生活していたんだ、――彼等はどこで、どうしているのだろう？

本当に、この散り散りの仲間に、連帯はあるんだろうか？

と初めは思った。

パトロールで見慣れない野宿者に出会う。センターの話をした。

初めは寝ながら、上の空で聞いていた彼も、興味を持って起き上がった。

「不景気なんだよ。仕事がなくて、看板持ちをしていたら、看板までとりあげられて、遂に野宿。要するに、オレたちに死ねってことだよ！」

彼等には怒りのエネルギーがある。その怒りのエネルギーが、自ずと一つの希望に向かって凝集する。「このビラ大事にとっとくから。5月1日には必ず行くから。」

私は初めてメイデイに参加する。その由来も初めて知った。

この小さな公園に、一体どれくらいの人が集まるのだろう？

しかし、その小さな公園は、次々と来る人で埋まっていった。

そしてデモが始まったとき、生まれて初めて聞く、地に響くような大衆の声を聞いた。

すごい・・・

こんなにも、彼等は生きてきた

こんなにも、彼等は生き抜いてきた

そうして生き抜いてきた仲間がこんなにもいた

それは物凄いエネルギーだった。

このエネルギーはかならず何かを変えていく。

この散り散りの仲間に、連帯はある。

中村さん、下谷さん、相内さん、ゆうこさん、この声がきこえるだろうか。

こんなに沢山の人が結集したよ。

私は、運動のこと、政治的なことは、よく知らない。ただこの、見えないけど、途方もない力を持ち得る、仲間の繋がりを凄いと感じた。

どっこい、生きてる彼ら。

たとえどんな距離にあっても、

私は　彼らと共に生きていきたい。

Just May Day on May 1th 1998

この胸があつくなる時

本田さん

全都の合同パトロールでは、池袋と東京駅・銀座・日々谷を皆で回ったんだ。池袋と東京は3年前にも回ったことがあったんだけど、都庁突入闘争で弾圧を受けたりで、結局中途半端でやめてしまった。だから、「今さらお前ら何しに来た」って、追い返されるんじゃないかって不安だったよ、正直なとこね。

実際回ってみると、これは当然だけど、3年前とは顔ぶれが全然違っている。そりゃそうだよね、仕事を探しながら流動しているわけだから、ずーっと同じ場所で野宿なんかしてるわけないもんね。

よく「池袋の人間は」とか「東京駅の者は」、なんて場所によって労働者の気質が違うような話しが出てくるけど、どこも同じだよ。そんなに違うわけがない。違いがあるとしたら、労働者同士の関係性のあり方ぐらいのもので、仕切っている人間がいると雰囲気が悪いよね。でも、どこの場所でも皆うまくやっている様子だったね。

反応はとてもよかったよ。

こんな野宿なんかしてる自分たちに話しかけてくる連中がいる。一緒に行動しようと呼びかけてくる。それだけで驚きだって感じだったね。著名はほとんどの仲間がしてくれたよ。うれしかったな。

メーデーの当日は東京駅の待ち合わせ場所に行ったんだ。もう仲間が一人待っていて、それから三々五々集まってきた。結局9人きてくれたよ。

「東京駅の人間は団結力がなくていけねえ。30人ぐらい集まると思っていたんだけどなあ」なんて話しをしていた仲間もいたよ。

柏木公園に着いたら、もう凄い人間だろう。びっくりしたよ。池袋から25人も集まったって聞いて、それだけで胸が熱くなってきた。

それから渋谷と上野の仲間が旗を立てて来ただろう。これでもう涙が出そうになったよ、本当に。

パトロールで一緒に回った仲間と、「やったね」と握手をして回った。なんかこう舞い上がった気分だった。

新宿からは、わざわざ仕事を休んで来てくれた仲間もいた。懐かしい顔もあった。仲間が一堂に会する場としては、本当に素晴らしい行動だったと思っているよ。

後日、池袋を回ったら「25人しか集まらないなんて恥ずかしい話だ。今度皆で仲間の会を作ろうと思う」と話していた仲間がいた。メーデー行動はいろんな意味で、全都の仲間たちに活力を与えたんじゃないだろうか。

自立支援センターの話しはこれからも続けていかなくちゃいけない。呼びかけたからには責任を持つ。今度胸を熱くするのは、皆の力でセンター開設を勝ち取った時にしたいね。

「明日は我が身」の労働運動

チューちゃん

代表団で都庁へ署名を届けた。代表団は全部で8人だった。長い部屋で、中は静かだった。話したのは、ものの20分くらい。

「夢と希望のかかった署名なんで、一刻も早く自立支援センター作って下さい」なんて、オレのキャラクターに合わないことを言っちゃった。

400人集まったけど、あんなに集まるもんかと思った。去年は新宿にいたけど参加しなかったから。

署名集め、池袋・東京・隅田川・渋谷・馬場・全部参加した。行かなかったのは、上野だけ。たいてい、すんなりしてくれた。東京では山谷の荒木さんや酒井さんと銀座の方へ行った。地下は11時までいられる。11時過ぎると上に移動する。新宿みたいに警備員がとげのある言い方しない。おまわりが後についてくることもないし。身の回りはきれいにしていて、何も言われないみたい。

池袋では、交番の脇に寝てるなかまもいる。つまり、おまわりも黙認してるんだ。酒は飲んでないみたい。飲んでも寝酒くらいなんじゃないか。新宿みたいに酒盛りしてない。外から見た感じだけど。新宿でビラまきしててハナから「そんなのいらない」って言うなかまもいるけど、そういう人、全然いなかった。「新宿みたいに組織作りたいね」と池袋のなかまが言ってた。炊き出しとか、資金がないから、どうなんだろうね。話し合いだけでも、週に1回やってったらどうかな。メーデーの日、20人来たんだし。

東京駅の人が言ってたけど、福祉の取り方知らない。新宿に連れて来ちゃってもいいんでしょ。でなきゃ、かわいそうだ。アオカン通院はひどいよ。イケイチ（ドヤ）にでも入れないのかな。

この生活2年やってんだけど、一般の生活やってるより、いっぱい勉強になる。三鷹に15年いたんだけど、その頃は、ダンボールハウス投げちゃえばいいと思ってた。こっちに来て中に入ると、みんな、なかまだ。あれは偏見だった。「明日は我が身」っていうのを体験した。背広着てネクタイしめてるヤツらだって、どうなるかわからない。話し聞くと、この前まで社長だった人が、おにぎり並んでるって言うし。初め、新宿連絡会なんてなんだと思ってた。炊き出し並んでた方なんだから。この頃じゃ、毎週、炊き出し作りに行ってる。

て。去年の7月6日に入った。
連絡会の、ねり歩き、さんざん歩いた。百人町とかな。炊き出しもさんざん行った。鍋洗ったり、米といだり。ビラ配り。神田の方も回ったな。新光館は坂のぼり下りして、飯田橋から電車で帰ってきた。
正月は、もちつきやった。雪の日の日雇い全協大会も行った。火事のときは、朝ラジオ聞いたから。俺が来たときは、まだいぶってた。引っ越し手伝った。入らない荷物、山谷へ持ってった。
メーデーに向けて、新宿の南口で署名とった。池袋と東京駅は行かなかった。馬場は、いっぱい来るかと思ったら、5人しか来ない。戸山公園で二手に分かれてビラ配り。伊藤さんと二人で配った。馬場は水曜のたんび。みんな素直にサインしてくれた。自立支援センター、できればいいと思う。今、けっこういるもんな。丸の内線のところ。11時になったらすごい。
メーデーの日は、みんなのけつついてった。旗持ってる人の後。笠井さんのすぐ後。安江さんも行ったろ。池袋、上野からも来た。上野がいちばん多かったべ。北野のばあちゃんとコンビで弁当配った。弁当足りなかったんだ。

Just May Day on May 1th 1998

こんなにも、彼等は生きてきた

編集雑記

暑さ涼しさのくり返しで、体調を崩しやすい日が続いています。いかがお過ごしでしょうか。今年は一年で最初の台風が来るのが最も遅い日を記録しそうだということです。
さて、新宿連絡会によるメーデーは、今年で4回目になります。今年は、署名が1831人、当日のデモ500人という数にのぼりました。野宿労働者、その支援者の労働運動として、一つづつ歩を進めてきています。今後も一層のご支援をお願いいたします。
今号の新宿写真館は、橋本さんの写真と岡田さんの文章との共作になりました。いつもながら、橋本さんの写真には驚かされます。黒い箱の扉を開けて写し取った一枚の紙に過ぎないのに、ずしりとくるのはなぜでしょうか。

さあちゃん

いろんな仕事やったから、いちいち覚えてないが、45～6才から建築の仕事やった。その前はガードマンだったな。足立区でおっかあもおったから、部屋借りてた。離婚して子供と一緒に出て行った。おっかあは死んじゃったらしい。

おととしの4月頃、目、手術して退院したあと、戸山荘（ドヤ）にいたけど、相模旅館に移った。そこに伊丹さんがいたんだ。相模に10年もいるって。伊丹さんとは15年くらい前、阿佐ヶ谷でいっしょに働いた。建築現場の大工。伊丹さんは全然やり方がわからなかった。根切りして、壁作るのに鉄筋建てて、八板わたす。八板の裏へ泥入れるんだ。おやじが教えてやれって言ったから、教えてやったんだ。

医者がいいって言ったから、仕事行ったんだ。荻窪。その会社つぶれちゃった。新宿もどってきてアオカン。それまでアオカンしたことない。腰痛めたから、病院へ行った。新宿福祉の田代さんが、社会保険中央病院へ行けって言ったから行った。医者が「4年間仕事行けませんよ」って。田代さんが、新宿荘空いてるから、入れっ

北野　良子さん

隅田川へ署名集めに行った。素直に署名してくれて、よく集まった。文句言わないで、「ごくろうさま」とか。疲れた。意外っていうほど集まった。こんなに集まると思わなかった。「仕事に行くから。後で署名するから」って言った人もいた。お弁当、足りなかったけど、みんな「おいしい」と食べてくれた。

池袋へ署名集めに行ったとき、落合の方へ行っちゃって、池袋駅へ帰ってこれなくなった。坂本さんが「こっちへ仕事来たことある」と案内して、目白まで行っちゃった。次のときは「今度大丈夫かしら」と不安になった。

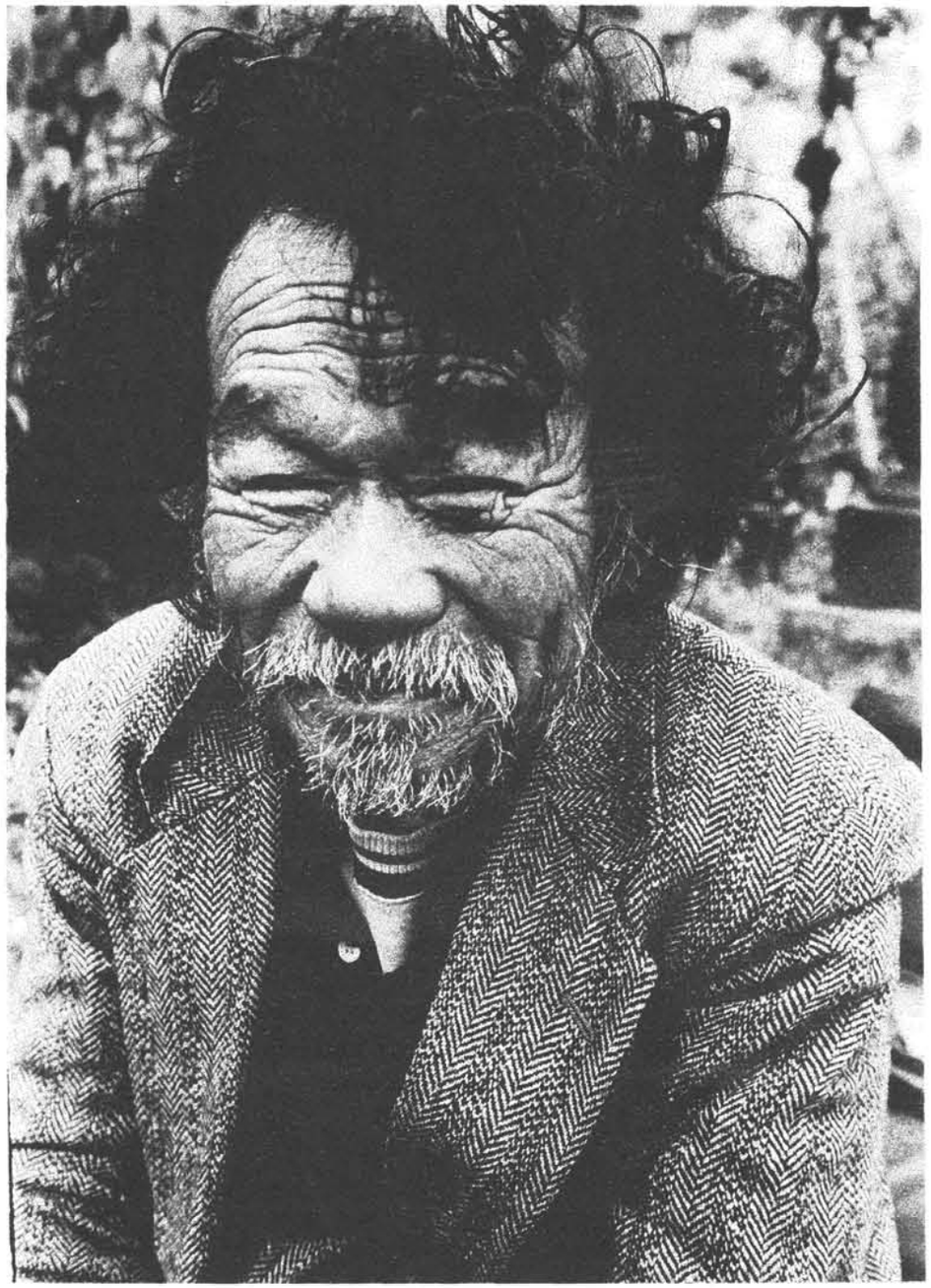
特集インタビュアー・安江

新宿写真館

No.Ⅳ

写真・橋本弘道

渋谷



隅田川

つい先日、東京の夜を歩きました。上野から御徒町、秋葉原、神田、そして東京駅。ガード下に並ぶいくつもの古びたリヤカー。ある橋のたもとにさしかかった時、光を見ました。どこからその力が湧き出てくるのか？段ボールを積み上げたリヤカーが後ろにひかえていなければ、夜の闇に溶けてしまいそうな、小さなおっちゃん。痩せ細ったその足の一歩は、勢いはないけれど、静かに確実に、橋の緩やかな斜面を歩んでいきます。かたつむりのごとき歩み。斜面は緩やかなれど、すきあらばおっちゃんの体重に逆らって、一人走りだすであろうリヤカーの重さかな。その勇ましい姿に目を奪われ、言葉を失った姉ちゃんの存在などに気付くはずもなく、前進あるのみの光り放つ人――――。

あれは大雪の夜。都庁の軒下で寝転がっているおっちゃんに出会いました。酔っているのか「ここは冷えるから地下にいきませんか」と言っても動こうとはせず、話す言葉も聞き取れない。段ボール村へ助けを呼びに―。おっちゃんを車いすに乗せ毛布をかけて「急げー」。車いすをみんなで持ち上げ、雪降り積む夜を駆け抜ける。行く手に見える、巨大な屋根―新宿地下街の放つ灯り、街を彩るイルミネーション。それらの何より輝いて見えたのは、みんなの無我夢中の後ろ姿でした。車いすに乗ったおっちゃんの運動靴からは靴下のかわりにスーパーの白いポリ袋が見えました。地下に辿りついたもののおっちゃんの体は冷たくなっていきました。救急車に運ばれましたが、まもなく帰らぬ人となりました。染み込む水から足を守るためにはいたスーパーの袋。おっちゃんの生き抜こうとする姿が、最期まで白く光を放っていたように、今も思えてなりません。

（文・おかだ　ともこ）

番外編

ダンボール村なき後の新宿事情

笠井　和明

路上からの考察

3回にわたって連載をさせてもらっている拙稿の番外編を今回は書かさせて頂く。連載のその4（大正・昭和の下層社会考）は次号まわしとなるが、ご容赦願いたい。

1、新宿という街

「…新宿が銀座と違ふ所は、銀座程服装に制限されない自由さがある。銀座の夜の街では、印絆纏を着た人、労働服を着けた人は何んとしても、あのヘーブメントを歩いても威張れず、何となくさういう人に銀座の街灯は相応しないものであるが、新宿の灯は労働服を着けた者、印絆纏を着た人にも華やかに輝く。これが新宿の特色で、さういう人達に自由な気分を与えてゐる所に、新宿の繁栄はある。以て新宿の物価が安く、食物が豊富で安いのも解る所以である。而して、これが本当の街であって、あらゆる階級の人が交響する所に本当の街の生活はあるのである。」（「自由な新宿」生田葵）

今から68年前、昭和5年に創刊された雑誌「大新宿」には、このような知識人の新宿賛美の声がちりばめられている。

日本一の歓楽街歌舞伎町、西口の超高層ビル街、南口のサザンシアター、現代の新宿は副都心という名とともに変遷し続けている。眠らぬ街、不夜城と呼ばれる新宿には人が途絶えることはない。Wカップでは数万の若者が集い歓喜の声をあげる。20世紀末の最後の楽園か爛熟した消費文明の末路なのかは知らぬが、この街にないものは一つもない。新宿の人波にもおそらくいない人はない。大衆という名に相応しい人々をこの街は日々吸い続け、吐き続けている。

「勿論、今の新宿は混乱そのものである。統一がなく、気品がなく、いたづらに雑駁で、洗練されたところはない。それだけに、荒々しい強い生気が搏動してゐる。一見粗野で、荒削りでrusticなところから、恐ろしい強い力と命が溢れてゐる」（「新宿の今昔」白石実三）

そう言われてみれば、新宿という街は昔から何一つ変わらない街である。変わったといえば、その雑駁さから、あらゆるものを受け入れてきたその不統一の規模だけである。

盛り場は昔から底辺下層の生きる場所である。盛り場は訳ありな人々を雇い、訳ありな人々が営み、訳ありな人々が働く場所である。学歴や履歴書が必要な世界ではなく、シマを仕切るやくざ屋が象徴するようなアンダーグランドの世界だ。そして、それだけに「恐ろしい強い力と命が溢れ」る場所なのである。町中の商店街とは位相を事にする歓楽街ならではのいきいきとした、そしてまたどろどろとした生命力がここには宿り続ける。

無論これを資本主義の腐敗の縮図などとヤボなことは言わない。不健全な町ならではの健全さを常に感ずる。つまり、僕も新宿の街の魅力に捕らわれてしまった新宿賛美者の一人である。

新宿の街に野宿者が居る。この事実は、新宿の歴史から言えば当たり前の事実である。逆に言えば野宿者のいない新宿の街はもはや新宿ではないとも言えよう。それが、良い、悪いという問題ではなく、この歓楽街の隠れた構成員として、僕らの友人達は歴史上ずっと居つづけてきたし、おそらく、これからも居つづけるであろう。

行政や健全な商店街の人々がいくら頑張ってみても、どだい、この街から野宿者を追放することなど出来やしないのである。ここ何年かの環境浄化運動や強制排除というものが、何の効果もあげていないのにはそういう根拠がある。この街に闇の世界が残る限り、そこに野宿者は居つづける。

2、新宿と野宿者達

90年代に入っての新宿野宿者の急増は、下層を吸収しながら巨大になった新宿の街から、最下層が急激に排出された結果である。西口の都市開発が一段落して建設日雇労働者が、新宿のサウナ、カプセル、ドヤから排出され、景気の悪くなった飲食店からは流しの板前や皿洗いがクビになり、住込みのパチンコ屋の店員も、風俗店のポン引きやら、チラシ配りやらも整理され、アパートをあてがってもらっていたカンバン持ちも追い出され、果てまたチンピラ屋もシノギがなくなり、手配師稼業も苦しくなり、あるいはヤクやシンナーにはまりすぎた中毒者であったりと、「いらなくなった」人々は、ここでは情け容赦なく整理、淘汰される。もちろんそういう仕事がまるで無くなった訳ではなく、依然としてこの街は底辺下層を吸収する力は相対的にもっているのだが、そもそも不安定の建設業、サービス業末端が、ますます不安定となれば、金のなくなった不幸な人々の行き先はやはり野宿生活である。

新宿の野宿者の基本構成は、まさしくこれである。建築だけの街でもないし、歓楽だけの街でもない。雑駁な都市下層の生業を集合させた乱雑な街であるが故、下層はこの街に寄せ付けられる。

4年前、僕らが新宿に関わり始めた頃、リーダー格の仲間が、しきりに「新宿は労働者の街ではない。掃き溜めの街だ」と言っていたが、その感触はこの街の最下層を見つづけて来たものだけがもつ感触である。ここの底辺下層はこの街の特性をそのまま反映させ、よりどりみどりの下層を形成して来たのであり、最下層へと還流してくるのもまたよりどりみどりな人々であった。失業＝野宿という単純な構図ではない複雑な色合いが、新宿の路上の底流のには常に流れている。人生いろいろ、訳ありな人々の集合体とも言えよう。

そして、それが、僕に言わせれば新宿の最大の美点であり、魅力である。

新宿の路上は掃き溜めでまったくかまわない。掃き溜めであったとしても、路上が墜ちるところまで墜ちた人々の防衛線になりさえすれば良いのである。　今も昔も、訳ありで不幸な人々が野宿になる。それだけでいいのではないかと、最近僕は思っている。「訳」や「不幸」の分析など知ったかぶりの学者にまかせておけばいい。頭で分かったとしても、そんなことは僕らにとっては何の意味もない。変に分かったつもりになることが、この世界では一番非情なことだからである。

話しがそれたが、新宿の街には野宿者を排出する根拠が歴史的に存在するという事が言いたいのである。ドヤがある、サウナがある、カプセルがある、ラブホテルがある、映画館がある、深夜喫茶がある、マクドナルドがある、電車もいくらでも走っている。これが新宿の街で、金があればどこでもシケこめるが、金がなくなりゃ、公園や路上で野宿。これが新宿の街である。

そして、また新宿の街には野宿者を吸収する根拠もまた歴史的に存在するのである。無秩序な都市構造故に寝る場所もまたよりどりみどり、欲望に目がくらんだ大衆の街の安心感、活気のある街にはおこぼれも沢山ある。酔っ払いが物を平気で落とし、捨てて行く。それを探しあてる地見屋さんなど伝統的な新宿の生業。少なからずの現金収入の道も千差万別とある。野宿者＝残飯漁りというマイナスイメージが植え付けられているが、もちろん、それだけではない。それぞれのプライドと生業を多くの人々は持っているし、それが持てる環境が新宿の雑踏の中にはあるのである。

新宿のこの街は、底辺下層を吸収し、そして最下層を排出し、そしてまた吸収しと、そんな循環構造を街自身がもっている街であり、それなくして今の新宿の繁栄はなかったであろう街である。野宿者はこの街の構成員だというのは、そういう意味である。

新宿福祉の武山前課長は「新宿にホームレスがいなくなることは絶対にない」とその昔断言をしていたが、さすが新宿を熟知している課長の言。健全な商店街の皆様や、健全な新宿区民の皆様も新宿を愛しているのなら、その位分かってもよさそうなものを。

3、新宿の野宿者達

不幸な事故をきっかけに、西口地下広場のダンボールハウス群は集団移転という結末を経て消滅した。新宿ホームレス＝西口地下ダンボール村というステレオタイプの考え方をお持ちの方々は、この突然の事態を受けてパニック状態になったようで、中には運動もなくなったのではないかと誤解している方もいる。もちろん、ダンボール村ひとつ無くなったくらいで由緒ある新宿の野宿者が消え去るということはない。だから、今も運動は日々続いている。

ダンボール村なき後、新宿の野宿者居住形態は大きく変った。駅周辺では定住型の居住が極端に少なくなり、流動型＝夜間のみの野営スタイルがほとんどを占めることとなった。村の仲間で自立支援センターへの入所を希望しなかった人々は、周辺の公園などへ移住し、被災を受けなかったその他大勢の仲間は、今も夜間だけダンボールハウスを作って西口、東口のビルの谷間などで寝、西口地下の流動型の仲間は交番裏の一角で、深夜の集団野営を続けている。このように、今も駅界隈では600人近い仲間が野宿をする。

村がなくなり、しばらくしてから、僕は気が付いた。村にこだわりすぎた結果として、夜間だけ寝場所を求める流動型の仲間の事に思いが至っていなかったことを。

そう思うと、自然に、そんな仲間と同じく、歩き続けてみようという意欲が沸いて出、僕は夜昼かまわず、新宿の街や東京のあらゆる場所を歩き続けていた。試しに新宿から山谷まで歩いた。神田川も下流が隅田川に至るまで歩き続けた。目黒川も、玉川上水の跡地も歩き続けた。

おもしろい発見もあった。新宿からは、新宿通り、靖国通り、明治通りという街道沿いには必ず仲間が寝ているということである。仲間は街道沿いをひたすら歩く。明治通りは池袋、渋谷へとつながる。新宿通りは四ッ谷、神宮外苑へとつながる。靖国通りは飯田橋へとつながり、神田川に沿って行けば、東京駅や神田くんだりまで抜けられる。野宿者の交通網というのは、各地の集住地域とかなり繋がっているのである。とりわけ、新宿、渋谷、池袋というのはほとんど境がないということも実感としてつかめた。ある程度歩ける範囲なら、彼・彼女らは日々往復しながら、様々な生活の糧を求めている。駅別、区別の僕らが思うようなテリトリーというのは、流動型の仲間にはあってないようなもので、かなりの地域流動をこの層はしている訳である。

そもそも東京の山手線内なんてのは、そんなに広い地域ではなく、交通の便がよすぎるから僕らは鉄道などを利用するだけであり、４・５駅くらいは平気で歩ける距離である。僕らが勝手に使っている東京内の野宿者地域概念（例えば上野の仲間、浅草の仲間などと言う言い方）も歩いてみると、わりかしいいかげんなものであった。東京というのは意外と身近に感じられるもので、これまでの地域に閉塞した発想では、とうてい全都の仲間の諸問題は対応しきれないとしみじみ思った次第である。

まあ、それでも新宿賛美者の一人である僕などは、新宿にやはりこだわる。

富久町という、地上げ屋にあって町がボロボロにさせられた町が新宿から歩いて20分くらいのところにある。今、地元の人は町起しに精を出しているようだが、ここにもまた我らの友人達は、だれも住んでいないマンションなどの敷地に入って5-6人が寝ぐらを作っている。聞いた話しによれば、フランスの建物占拠よろしく、誰も住んでいない一室に勝手に住んでいる兵もいるとか言う。廃墟の町とホームレスというのも、なかなかのセッテングであった。　曙橋の下の児童公園もまた10人ほどの友人達がほぼ制圧をしている。ここいら辺、新宿区の旧四谷区側は、さすが、四谷鮫河橋からの伝統ある底辺下層の町、町並みの中にも昔をしのばせる家並が結構残っている。もちろん戦後の建物であるが、区画整理されていない曲りくねった道であるとか、町名の複雑さなどは、戦前をそのままひきづった感がある。

旧淀橋区側で、下層をしのばせる地域は、かなり少なくなってきている。が、新宿４丁目あたりと西新宿６丁目近辺は僕の最も好きな場所。残念ながらここら辺にはあまり仲間はいないものだが、その代わり４丁目のわずかに残ったドヤ街は生活保護の仲間が多く住む。

戦後の「不法占拠」バラック村＝通称「越冬村」があった、今は都営住宅が並ぶ都営戸山団地は、新宿下層史にとっては画期的な地域。その近くの戸山公園には150件ばかりのテントが今でも「不法占拠」を続けている。今はかなりすたれたけれど馬場の寄せ場でここの住民は毎朝仕事を探す。かつては百人町のドヤ街や新宿のカプセル、再開発前の西新宿などのボロアパートに住んでいた人々が、今やテントでの野宿生活。この地域、夜間野宿人口はテントを含めて300人近くになる。

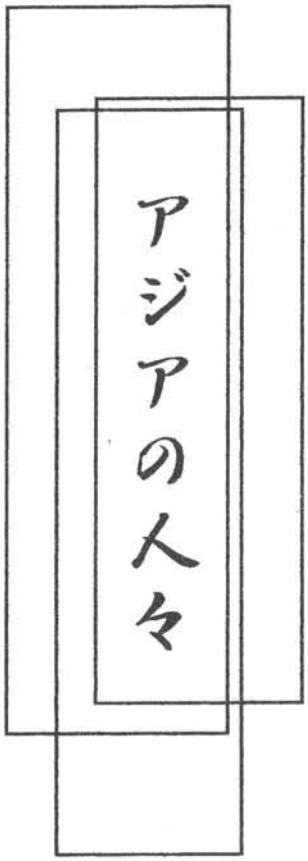
ダンボール村が無くなってしょぼくれてる人々には是非、新宿めぐりをすることを勧める。この街は下層の宝庫のような街であり、そして、それが街の雰囲気と違和感なく溶け込んでいる不思議な魅力をもった街であるからだ。

歌舞伎町の人込みの中、紙袋をもったおっちゃんが何食わぬ顔で通り過ぎる。誰も振り向きはしないごくごく自然な格好で。

「これが本当の街であって、あらゆる階級の人が交響する所に本当の街の生活はあるのである。」

（了）

シリーズ



その3

安江鈴子

センギは、バンコクの中心に位置する60年以上の歴史を持つ典型的なコミュニティである。コミュニティの古老によると、地域には公式の名があったが、中国系の人は自分たちの名で呼び、自分たちはチャオプラヤー湖畔にあったセンギ水車場にちなんで“センギ”と呼んでいたという。王室財産局の土地に家を建てる世帯で、コミュニティが形成されていった。

1978年4月、大火事がセンギを襲い（火が出ると、それまでの暗黙の了解としてあった权利などがただちに消滅してしまう）、コミュニティの80%が消失した。焼け出された人々は之の場所に家を建てたが、全体のプランを欠いていたし、新しくスクウォッターも流入して、コミュニティは無秩序に広がっていった。コミュニティの中枢には依然として古くからのつながりがあったが、借地の法的整備やインフラなどのコミュニティ全体への投資などは進展せず、コミュニティの全体状況は悪化していった。

折しも、この地域の地価は高騰し、コミュニティの腐敗もあって、王室財政局は、土地の開発計画を打ち出した。センギの住民は、この問題の解決を図りたいと思ったが、知識や経験が足りず、方途を見出せないでいるところに、近隣のコミュニティがランドシェアリング（コミュニティ内の家々を区画整理し、圧縮して、残った土地は地主に変換すると同時に、コミュニティには土地の法的な所有権が地主から譲られるというシステム）に成功したというニュースが入る。

このニュースが、センギの状況を進展させた。王室財政局が国の住宅省にセンギ問題の仲介を申し入れ、住宅省は居住研究センターに、センギのランドシェアリングの可能性を調査させた。複数の国連機関からの援助や融資を以て、センターはセンギコミュニティとプロジェクトを進めるのである。プロジェクトはセンギコミュニティが全体的に参画できるよう展開された。

アジアの国々ではスラムと都市開発政策の衝突の解決策としてセンギのようなランドシェアリングや再定住策（元のコミュニティの場所から、多くは、郊外に提供された土地に移る）がとられるが、

タイでは都市開発で土地が投機の対象になっていて、地価の高騰も激しく、地主はランドシェアリングに応じるのを嫌い、ランドシェアリングは減少の傾向にあるという。

４月半ば、アジア居住ネットワーク（ＡＣＨＲ）の総会がバンコクで開かれ、私も無理をお願いして参加させてもらった。地域ごと分かれて、現状や今後の取り組み・方針について論議し、全体会で発表するという、文字どおり“会議”が日程のほとんどだったが、前述のセンギコミュニティや、橋の下のコミュニティ（バンコク市内のコミュニティは土地に小屋を建てたスラムが多いが、このコミュニティは橋の下に住んでいる、というところがユニーク。こういうコミュニティもかなりの数にのぼり、当局は、これらのコミュニティにあ2.3年のうちに立ち退いてもらう、という方針をもっているという）の見学もプログラムに組み込まれていた。

日本は、香港・韓国とともに東アジアグループだったのだが、韓国のメンバーから「反失業に取り組もう」「ＩＭＦの施策が問題だ」という意見が出された。ＩＭＦの施策が貧困層に苦渋を強いているという。また、韓国でも失業率の上昇が大きな問題となっているが、インフォーマルな経済活動に従事している層としては協同組合を設立して、フォーマルな経済活動に食い込んでいきたいのだそうだ。

インドネシアではインフレが続き、近隣諸国に広まることを恐れたＩＭＦの指導で公共料金を値上げしたスハルト大統領が、学生や人民の追求に遭い、辞任に追い込まれたことは記憶に新しい。

私はアジアの国々の実状など何も知らなくて、ＡＣＨＲで居住への闘いを担っておられるＮＧＯの方や、コミュニティリーダーの活動をつぶさに知る機会を得たわけだけれども、それぞれ歴史や政治的・文化的状況が違うのに、居住の権利ということで、よくこれだけいっしょにやれるなあ（情報交換や実際の交流など）と感じていたのだが、グローバル経済の、上からの流れには、“ＩＭＦの施策”があるのだということを理解した。居住への闘いを担っている人たちは、声高にＩＭＦを糾弾するというような政治的な活動をしているのではなく、自分たちがコミュニティを組織し、力をつけて、自分たちの居住の权利を実現していくことを目指している。それは各国政府の住宅政策がトップダウン型開発方式（政府や公共セクターが住宅を生産・供給する中心的役割を担うこと――明石書店「ハンドブックＮＧＯ」「人間居住とＮＧＯ」の章より）からイネーブリング戦略（政府の役割は民間セクターや住民が自分たちの手で住宅を建設し、環境改善を行えるように、その能力を引き出すｅｎａｂｌｅｒである、という考え方――同）に」変更されていった結果に対応しているのかも知れないが、開発額の分野では、このような動きを「貧しき者の文化）と評価する思潮もあるという（同）

ダンボール村でも、まさにその「貧しき者の文化」を誇りに思い、胸を張って、社会に訴えてきたのだったなあと思う。

＋うそー。
＊そうだよ、で30過ぎたらおばあちゃんだよ。
＋うそだー、そんなの聞いたことない、誰が決めたのそんなこと。
＊昔からだよ、で50過ぎたらおばあだよ。
＋ふーん、「ちゃん」もなくなるんだ。

・
・
・

＋今から戸山荘行くんですよ。
＊一緒に行ってやるよ、俺詳しいからあの辺。
＋そうですかー。
＊やることないもん、暇だもん。
＋うーん。
＊帰りにラーメン買って帰ろ、3個100円。
＋へー、安いねー。
＊うん、安いよ、3個100円、やきそばも3個100円。
＋さいとうさん、自炊するの？
＊するよ、何でもあるよ。
＋ふーん、まめそうに見えないのに。
＊なんで？　するよ、若いころはなんでもやったよ。
＋さいとうさんてよく「何で？」って言いますよね。
＊出ちゃうんだ、なんか出ちゃうんだ。
＋ふーん、そうなんだ。
＊そうだよ、お・ば・ちゃ・ん。
＋もー、おばちゃんじゃないってー。

さいとうさんはスケベさんだ。
会えば必ずスケベなことを口にする。（ここには書かなかったけど）
スケベな言葉が口癖みたいだ。
あと、「冗談がいーよ。」と「なんで？」も口癖みたいだ。
「冗談がいーよ。」は、さいとうさんがつらい時（冬とか）によく口にするような気がする。
つらい時ほど冗談が必要なのかな。
私が新宿に来始めた時、最初にいろいろ声をかけたり、教えてくれたりしたのは、
さいとうさんだった。さいとうさんのおかげで、私は新宿の地理に少し詳しくなった。
さいとうさんは本当にスケベさんだ。
・・・それでもまた、私はさいとうさんとおしゃべりする。

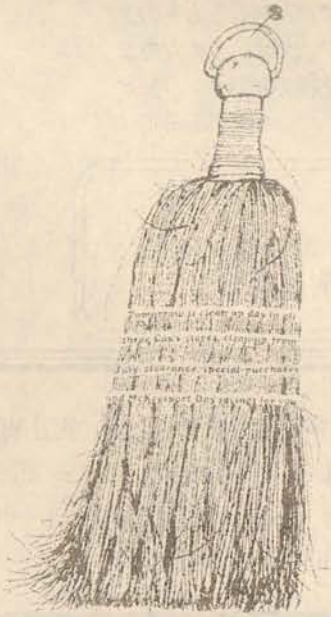
道ばたの記

出口　万記子

とある月曜日の昼時、新宿区役所前にて

＊　さいとうさん
＋　筆者

＊　ウッス
＋　ウッス、ねーさいとうさんおしゃべりしましょうよ。
今度ダンボール村通信に、さいとうさんのおしゃべり模様を
書こうと思ってるんです。
＊　いーよー
＋　なんでー？
＊　いーよ、おばちゃん。
＋　おばちゃんじゃないよ、おねえちゃんだよ。
＊　ちがうよ、新宿では昔から20過ぎたらおばちゃんだよ。
＋　うそー。
＊　ほんとだよ。



活動日誌

5/1　全都野宿労働者統一メーデーに500人が参加。1831名分の野宿労働者署名を都知事に提出。
5/6　自立支援センター（本格実施）の区内誘致などを求める要望書を新宿区に提出。
5/13　自立支援センター（暫定実施）入寮者・新宿連絡会と東京都福祉局が団体交渉。寮内処遇改善などを求める。
5/26　メーデー実を引き継ぐ全都野宿労働者統一行動実行委員会（全都実）発足。
5/27　自立支援センター入寮者代表が都庁を訪れ、福祉局と交渉。アルバイト制度の確立など団交時の「宿題」をクリア。
5/30　新宿駅南口ルミネがガードマンを配置し、階段で休を休めていた多数の仲間を追い出す。
6/3　全都実が6・19集会呼びかけパトロールを各地で開始。
6/8　新宿区が法外援護のカップ麺（一日一回）を7月末でやめると突如、発表。
6/19　「自立支援センターの早期開設を求める集会」に都内各地から300人が結集。
6/22　カップ麺廃止問題で新宿連絡会は新宿区生活福祉課と団体交渉。
6/23　全都実と東京都福祉局が団体交渉。

会計報告

（98年3～5月期）

収入	郵便振替カンパ	68口	743、776
	通信会員費	3口	15、000
	路上カンパ・通信売上		32、000
	返済金（山谷より）		111、746
	3・7集会会場費		19、400
			921、922
支出	炊事関連費		282、133
	交通費		407、160
	印刷代		75、483
	コピー・DPE費		15、574
	文具・図書費		21、028
	発送費		73、380
	車両レンタル・燃料など		37、929
	電話代（2～4月）		41、499
	薬代		5、275
	会場費・使用料など		27、000
	備品		12、064
	雑費		20、369
	メーデー実分担金		24、458
			786、430

収　支	△ 121、430
前期繰越金	942、358
次期繰越金	820、928

夏期カンパをお願いいたします

読者の皆さん、いつも購読ありがとうございます。毎回カンパの要請ばかりで心苦しい限りですが、今年も夏期カンパのシーズンがやってきました。働く多くの方々に、とくにお願いする次第です。

今年は炊き出しの数も現在12釜、約600食と、一向に減る兆しがなく、一度につき150kg単位の米が消費される事態が続いています。また、全都実展開の中、都内各地へと動きまわる日々が続き、その活動費も多く捻出しなければならない状態です。私達の活動は、一般の組合などと反対に仲間を組織すればする程、金がかかるというおかしな活動で、炊き出し費用、活動費用を多くの方々のカンパで賄わなければなりません。野宿者問題を社会問題として理解される方々の支持と協力の上でしかなりたたない訳です。その点をご理解頂き、是非、皆さんからの応援の夏期カンパをどうかよろしくお願い致します。　（事務局一同）

カンパ送り先：
郵便振替口座　00170－1－723682「新宿連絡会」

編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）
連絡先：〒111 東京都台東区日本堤 1－25－11 山谷労働者福祉会館気付
☎ 03－3876－7073　FAX 03－3876－1869
現地：☎ 030－818－3450